

Title	円仁の記述するサンスクリット音節caの音価：九世紀日本語音推定の試み
Author(s)	小林, 明美
Citation	大阪外国語大学学報. 52 p.63-p.80
Issue Date	1981-02-28
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80832
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

円仁の記述するサンスクリット音節 ca の音価

—— 九世紀日本語音推定の試み ——

小 林 明 美

The Phonetic Value of the Japanese Syllable /サ/ as Pronounced in the Ninth Century

Akemi Kobayashi

In describing the Sanskrit sounds in his *Zaitōki* (在唐記), Ennin (円仁) (793-864) writes that the Sanskrit /ca/ (tʃa) corresponds to “the sound represented by the character 佐 in Japan” (本郷佐字音) and that the Sanskrit /śa/ (ʃa) corresponds to “the sound represented by the character 沙 in Japan” (本郷沙字音).

However in Japan, during the time of Ennin, these two phonetic signs 佐 and 沙 were interchangeable and represented the same Japanese syllable corresponding to the present [sa] (サ). Why then does Ennin equate the Sanskrit /śa/ with “the sound represented by 沙” while equating the Sanskrit /ca/ with “the sound represented by 佐”?

In answer to this question I verify that the Japanese syllable /シ/ was [ʃi] in the ninth century and that the Chinese /šǎ/ (沙) was pronounced as [ʃi-a] in Japan. I conclude that the initial consonant of the Japanese syllable /サ/ was [tʃ], the degree of closure (affrication) being the same as the initial consonant of the Chinese /tsa/ (佐) and the place of articulation (the hard palate) being the same as the initial consonant of the Japanese adaption (ʃi-a) of the Chinese /šǎ/ (沙).

I refer also to the works of Shinren (心蓮) (?-1181), who describes the initial consonant of /サ/ as [ʃ]. This suggests a natural phonetic change from [tʃ] in the ninth century to [ʃ] in the twelfth century, and, I believe, supports my conclusion.

The paper consists of five parts:

I Ennin and his description of the Sanskrit sounds.

II “The sound represented by 佐” versus “the sound represented by 沙.”

III Ennin's "sound represented by 沙."

IV The Japanese syllable represented by 佐 or 沙 (/サ/).

V The phonetic value of the syllable /サ/ in the twelfth century.

I 円仁とサンスクリット音の記述

円仁は793年に下野に生まれ、八才の時に地元の僧侶広智に引き取られて教育を受けた。十四才になった807年に比叡山へ行き、最澄の教えを受けた。822年に最澄が死んだ時は二十九才であったが、その後の数年間は延暦寺を離れ、比叡山中に庵を結んで修業の生活を送った。

藤原常順を大使とする第十七回遣唐使は838年に出発したが、円行、常暁および円載とともに、四十五才の円仁はこれに加わって中国に渡った。揚州では宗叡 (tsopyiuei) と全雅 (dziuensǎ) からサンスクリットの発音を学び、五台山を訪れた後、840年に長安に到着した。南インド出身のラトナチャンドラ (Ratnacandra) と北インド出身のナンダ (Nanda) から改めてサンスクリットの発音を学び、845年まで長安に滞在した。九年間の中国生活を終えて847年に帰国した時は五十四才であった。851年には延暦寺座主となり、864年に七十一才で死亡した。¹⁾

円仁は言語の音声面に強い関心を持ち、ラトナチャンドラから学んだサンスクリットの発音を入念に記録して、著書『在唐記』の中に収めている。悉曇文字一つ一つについて、その表わす音価を記述したものであるが、日本語固有の音韻や外来音 (日本式に発音された中国語の音) に適当なものがあればそれに対応させ、日本人の知らない音の場合は中国語に対応させるが、必要に応じてサンスクリット音との比較を試みている。

円仁は四人の人からサンスクリットの発音を学んだが、これがそれぞれ少しずつ違うものであったという。²⁾ 宗叡、全雅およびナンダの発音は、円仁自身によって記録されなかったが、安慧と長意を経て877年に安然に伝えられ、大著『悉曇藏』(880年)の一部に再現された。こうして円仁の伝えたものは、以後の日本人にとってサンスクリット音を知る上で最大のよりどころとなるのである。

サンスクリット音韻との比較対照のために円仁が用いたのは、日本語固有の音韻、日本で慣用されている外来音、そして中国語音韻であった。こうして円仁は、当時の日本語音韻を知る上で極めて重要な資料をはからずも残すことになった。

この論文は、サンスクリット音節 ca の音価を記述する『在唐記』の一行をとりあげ、対応す

1) 『三代實録』, 卷上 (『六國史』, vol. 8), 1930, pp. 202—203.

2) 宗叡と全雅の発音は中央インドの発音を伝えと言われ、ラトナチャンドラやナンダとの違いは方言差を反映するものと日本では理解されてきた。もちろん、サンスクリットに方言などあるはずもなく、サンスクリットの有声無気音を鼻音に代えるなど (ga: 誡 ŋa, ja: 若 nyak, ɟa: 拏 ŋa, da: 娜 na, ba: 麼 mua)、インドのどの言語にもないことで、インド人インフォーマント側の音韻体系を反映するものではない。

る九世紀の日本語音を推定しようとするものである。

なお、サンスクリット音韻の音価を確定するために、本論文では主として『ターイッティリーヤ・プラーティシャーキヤ』(*Taittirīyaprāṭisākhya*)³⁾を用いた。ヴェーダ(veda)を伝えた学派は四つあり、「プラーティシャーキヤ」(prāṭisākhya)とは、「学派(sākhā)ごとに(prati)〔伝わる音声学の手引き書〕」のことであるが、各学派の讃歌集(saṃhitā)の発音を扱う。祭儀を正しく行なうためには、正確な発音で讃歌を朗読しなければならなかったのである。リグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、黒ヤジュル・ヴェーダ、白ヤジュル・ヴェーダおよびアタルヴァ・ヴェーダの各派がそれぞれ独自のプラーティシャーキヤを伝えている。この種の文献は、紀元前500年から紀元前150年の間に著わされたと言われる。⁴⁾

古典期における文法学のめざましい発展は、ヴェーダ期における音声学研究成果に基づくものである。⁵⁾ しかしながら、独立分野としての音声学は、ヴェーダ期を過ぎると衰退し、古典体系に発展することもなかった。十七世紀の文法学者バットージ・ディークシタ(Bhaṭṭoji Dikṣita)の「口腔外調音運動」(bāhyaprayatna)の記述などから見ても、⁶⁾ ヴェーダ音声学の細部は後代になると文法学者にも理解されなくなっている。

中国と日本の悉曇学に見られる混乱と渾沌は、インドにおける音声学伝統の衰微に原因がある場合が少くない。例えば、軟口蓋音の調音位置を指定するのに本来は“hanumūla”(上顎の根元)という語を用いたが、⁷⁾ 後に“kaṇṭha”(喉)という語が用いられるようになり、もともと

3) *Taittirīyaprāṭisākhya*, ed. W. D. Whitney, New Haven, 1868; repr. Delhi, 1973. 本論文で引用する際には TP の略号を用いる。この版本には、注釈書 *Tribhāṣyaratna* が脚注として収められている。

4) Siddheshwar Varma, *Critical Studies in the Phonetic Observations of Indian Grammarians*, Delhi, 1950, p. iv.

5) 動詞語根(dhātu)をもとに次々に接尾辞(pratyaya)を附して語が形成されるが、インド文法学の課題はこのような語の形成過程を体系的に記述することであった。語形成の過程で起こる隣接音との同化や母音交代を説明するために、「同類音」(savarna)のカテゴリーが設定されているが、これができたのはヴェーダ時代に調音位置(sthāna)と調音運動(prayatna)が綿密に観察され、記述されていたからであった。なお、「同類音」(savarna)とは「調音場所と口腔内調音運動とが同じ音」と定義される。Cf. Pāṇini, *Aṣṭādhyāyī* 1. 1. 9: tulyāsyaprayatnam savarnam.

6) 『ターイッティリーヤ・プラーティシャーキヤ』は「有声音」と「無声音」の違いを次のように説明する。TP 2.4-5, 8, 10: saṃvṛte kaṇṭhe nādaḥ kriyate/ vivṛte śvāsaḥ/ nādo 'nupradānam svaraghoṣa-vatsu/ aghoṣeṣu śvāsaḥ/ 『喉(kaṇṭha)が閉じられると「響き」(nāda)が出る。開かれると「息」(śvāsa)が出る。「響き」を伴う音が「有声音」(ghoṣavat)であり、「息」を伴う音が「無声音」(aghoṣa)である。『このように、「喉の閉鎖」(kaṇṭhasaṃvāra)と「開放」(vivāra)は生理作用であり、「響き」と「息」はその作用の結果生じる生理現象である。そして「有声音」と「無声音」はそのような生理現象を聴覚の対象としてとらえたものである。ところが、Bhaṭṭoji Dikṣita は、saṃvāra/vivāra, nāda/śvāsa, ghoṣa/aghoṣa を全く同じ平面に並べ、これを十一種の「口腔外調音運動」のうちの六つとして列挙している。Cf. *Siddhāntakaumudī* ad 12 (8.2.1).

7) TP 2.35: hanumūle jīhvāmūlena kavarge [kārye] sparśayati.

調音位置が「喉」(kaṇṭha) とされる母音 /a/ と同じカテゴリーの音韻として扱われるようになるが、⁸⁾ このような混乱は十七世紀の日本にまで及び、浄厳の『siddham 三密鈔』記載の五十音図でもア行音はカ行音とともに「喉音」とされている。⁹⁾

ヴェーダ期以後のインドで音声学は古典研究のため基礎科目ではなかった。インドに留学した中国人は文法学習の一部として断片的にインド音声学を学んだにすぎず、中国に行ったインド人もサンスクリット音韻の一つ一つについて音声学的説明を加えることはできなかった。円仁がサンスクリットの発音を習ったラトナチャンドラも、いわゆる「結合母音」(二重母音)の本質について教えることができなかったのである。もっとも、「均質母音」(samānākṣara)と「結合母音」(saṃdhyakṣara)との対立については、原理が理解されないまま中国に伝えられていたらしく、「直韻」と「拗韻」の対立が設定され、十四世紀以降の日本ではこれが「直音」と「拗音」の対立に転用されて今日に至る。¹⁰⁾

このように、中国と日本の悉曇学の歴史は、原理が十分に理解されないまま無秩序に取り入れた数多くのインド的カテゴリーを何とか体系化しようとする努力を積み重ね、中国語や日本語の現実に基づく修正理論や新理論を次々に加えてきたものであると言える。今後の悉曇研究の発展のためには、ヴェーダ音声学を正確に理解した上で以後の「誤解と修正の歴史」を一つずつ解明して行く作業が必要と思われる。

II 「本郷佐字音」と「本郷沙字音」

8) *Siddhāntakaumudī* ad 10 (1.1.9) : akuhavisarjaniyānām kaṇṭhaḥ.

9) 山田孝雄,『五十音図の歴史』, 1938, pp. 26—27.

10) 安然是『悉曇蔵』の中で、「短韻」(a, i, u, ṛ, ḷ, e, o, aṃ)と「長韻」(ā, ī, ū, ṛ, ḷ, ai, au, aḥ)の対立のほかに、「直韻」(a, ā, i, ī, u, ū)と「拗韻」(ṛ, ṛ, ḷ, ḷ, e, ai, o, au aṃ, aḥ)の対立を認めているが、これはインド音声学の「均質母音」(samānākṣara)と「結合母音」(saṃdhyakṣara)の対立にほぼ相当する。「まっすぐな音」に対する「まがった音」とは「途中で変化する音」のことであろう。aṃとaḥはサンスクリットでは「母音+子音」であって「結合母音」ではない。ところが、中国音声学で「韻〔母〕」は「初めの子音を除く音節の残りの部分」のことであるから、aṃもaḥも「韻」である。ここにもインド音声学と中国音声学の混同が見られる。なお、「結合母音」については、注48を参照。

信範(1223—1297)になると、「a ア, ā ア, i イ, ī イ, u ウ, ū ウ」が「直韻」であるのは「一字の音」であるからであり、「e エイ, ai アイ, o オウ/ヲウ, au アウ/ヲウ, aṃ アム/アン/アウ, aḥ アフ/アツ/アク」が「拗韻」であるのは「二字の音」であるからだという(馬淵和夫,『日本韻学史の研究』, I, 1962, p. 624)。これは、インド文字ではなく日本文字(かな)に基づいた考察である。

さらに、信範の弟子了尊は、母音音節だけでなくすべての音節を「直音」(一字の音)と「拗音」(二字の音)に分ける。ka カ, ca サなどが「直音」とされ、kya キヤ, cya シャなど半母音[i]を含む音節が「拗音」とされる(ibid.)。この用語法が今日の国語学でも行われており、表記法の術語であるにもかかわらず、「サ行拗音シュ・ジュが直音化してシ・ジになる」(森田武,「音韻の変遷(3)」,『岩波講座・日本語』, 5, 1952, p. 269)のように、音声現象([u]の脱落)を説明するのに用いられている。

CA (以)本郷佐字音勢呼之¹¹⁾

『サンスクリットの ca は、“佐”の文字で表わされる我が国の音の調子でもってこれを発音する。』

サンスクリット音節 ca の音価 (tʃa)¹²⁾を記述して、記号“佐”を用いて表記される日本語音節がこれに対応すると言う。

“佐”の文字は、中国語では音節 tsa を表わす記号であったが、¹³⁾ 八世紀の日本において、後に仮名“サ”で表わされるようになる音節を表記するために用いられた。この日本語音節を表記する記号として、“左”“作”“磋”なども用いられたが、それぞれ本来は中国語音節 tsa, tsak, ts'a を表わすものであった。また、同じ日本語音節が“沙”“娑”または“舍”で表記されることもあり、この三つの漢字が表わす中国語音節は、それぞれ šă, sa および ʃiă であった。¹⁴⁾

11) 円仁,『在唐記』,『大日本仏教全書』, vol. 38, 1971, pp. 87—93。

12) 『ターイッティリヤ・ブラーティシャーキヤ』は、/c/ を発音する際の調音運動について、次のように規定している。TP 2.36 : tālau jihvāmadhyena cavarge [kārye sparśayati]// 『/c/ 系列の音〔すなわち /c/ /ch/ /j/ /jh/ および /ñ/〕が発せられる際、中舌を硬口蓋に接触させる。』

摩擦音 (ūṣman) が発せられる時にも「接触」が起こるが、その際には「調音器官」(舌)の中央が開いて狭い空気通路ができるという。Ibid., 2.45 : karaṇamadhyam tu vivṛtam// すなわち、摩擦音〔と半母音〕以外の子音(「接触音」すなわち閉鎖音/破擦音と鼻音)が発せられる時には、「調音器官」が「調音場所」に隙間なくくっついて、口腔中で完全に空気の流れを遮断するとされる。なお、「調音場所」(sthāna)とは、軟口蓋(hanumūla), 硬口蓋(tālu), 「口腔頂点」(mūrdhan) および〔上〕歯〔uttara-〕danta) のことである。また、「調音器官」(karaṇa)とは、舌根(jihvā-mūla), 中舌(jihvā-madhyā) および舌端(jihvāgra)のことである。

「接触」(sparśana)は子音(vyañjana)の場合になされる調音運動(prayatna)とされ、母音(svara)の場合の「接近」(upasaṃhāra)と対比される。母音が発せられる時は「調音器官」が「調音場所」に近づくだけであるのに対し、子音が発せられる時は「調音器官」が「調音場所」に触れるとされる。Ibid., 2.31-34 : svarāṇā[m] yatropasaṃhāras tat sthānam// yad upasaṃharati tat karaṇam// anyeṣām tu yatra sparśanam tat sthānam// yena sparśayati tat karaṇam//

/c/ 系列の五音のうち /c/ と /ch/ は無声音(aghōṣa)であるという。Ibid., 1.12 : ūṣmavisarjaniya-prathamadvitīyā aghōṣāḥ// 『摩擦音, /h/ および〔各系列の「接触音」(sparśa)のうち、〕第一番目の音(/k/ /c/ /t/ /t/ /p/)と第二番目の音(/kh/ /ch/ /th/ /th/ /ph/ が無声音(aghōṣa)である。』有声音(ghoṣavat)が発せられる時には「響き」(nāda)を伴うのに対し、無声音が発せられる時には「息」(śvāsa)を伴うとされる。Ibid., 2.8, 10 : nādo 'nupradānam svaraghoṣavatsu// aghoṣeṣu śvāsaḥ// なお、「響き」が出る時は喉が閉じるのに対し、「息」が出る時は喉が開くという。Ibid., 2.4-5 : saṃvṛte kaṇṭhe nādaḥ kriyate// vivṛte śvāsaḥ// /c/ と /ch/ はいずれも無声音であり、「息」を伴うわけであるが、/c/ の伴う「息」は量がより少ない(alpapraṇa)とされる。Ibid., 2.11 : bhūyān prathamebhyo 'nyeṣu// 『〔各系列の〕第一番目〔に置かれている「接触音」〕以外〔の無声音、すなわち /kh/ /ch/ /th/ /th/ /ph/ および /ś/ /s/ /s/〕が発せられる時、より多く〔の「息」〕を伴う。』以上で、サンスクリットの /c/ が無声無気硬口蓋破擦音[tʃ]であると確認される。

13) 七・八世紀の中国語音韻については、次の論文に基づいた。藤堂明保,「中国の文字とことば」,『学研・漢和大辞典』, 1978, pp. 1564—1599。また、各漢字の表記した当時の音価については、同辞典によった。

14) ここにあげた“佐”“左”“作”“磋”“沙”“娑”“舍”は、『古事記』と『万葉集』だけではなく、日本語

この二系統の漢字記号 (破擦音系統¹⁵⁾ と摩擦音系統¹⁶⁾) は、日本語を表記する際に使い分けをされておらず、二種の条件異音を区別するものではなく、まして二種の音韻を区別するものではない。二系統の記号は、同じ音声から成る同じ音節を表わし、互いに交代することができる。日本語の表音記号としては、いずれも全く同価値なのである。ただし使用頻度は同じではなく、主として用いられるのは齒茎破擦音系統の記号である。

ところで、サンスクリット音節 śa (ʃa)¹⁷⁾ に円仁が対応させるのは、「本郷沙字音」である。¹⁸⁾ ところが、この漢字“沙”は、日本では“佐”の交代記号として用いられていたものである。すなわち、二つの記号“佐”と“沙”は、同一の日本語音節を表わす。したがって、「本郷沙字音」という円仁の言葉は、「本郷佐字音」とは別の日本語音韻または異音の存在を示すものではあり得ない。日本語表記記号として、“佐”と“沙”は全く同価値なのである。ところが円仁は、この二つの文字を使って、二つのサンスクリット音節を区別しようとしている。すなわち、円仁はここで、“佐”と“沙”をいわば別の表音記号として使い分けているのである。¹⁹⁾

表記に適した漢字を慎重に選んで資料価値の高い『日本書紀』にも用いられている。このうちで“佐”“作”“沙”の三字は、「推古遺文」(七世紀前半)以来用いられている。

- 15) このほかに、“草”(ts'au), “酢”(ts'o), “讚”(tsan), “積”(tsiek), “柴”(džāi), “壯”(tšiaŋ), “者”(tʃiǎ), “尺”(tʃ'iek) があるが、『日本書紀』には用いられていない。なお、『日本書紀』だけに用いられているものに“差”(tʃ'ǎ), “磋”(ts'a) および“磋”(ts'a) がある。
- 16) このほかに、“紗”(šǎ), “散”(san), “薩”(sat), “相”(siaŋ) があるが、いずれも『日本書紀』には用いられていない。
- 17) 『ターイッティリヤ・ブラーティシャーキヤ』によれば、/ś/ が発音される際の調音運動は基本的に /c/ の場合と同じで、「中舌を硬口蓋に接触させる」(注12を参照)。ただし、完全に閉鎖がなされるのではなく、舌の中央が開いて狭い通路ができる。Cf. 本論文, p. 76, ll. 10—13. 注54。
- 18) 円仁, op. cit.: ŚA 以本郷沙字音呼之。但唇齒不大開、合呼之。
- 19) 馬淵和夫は「本郷佐字音」と「本郷沙字音」を円仁が「別の音韻として意識していなかった」とする。ca に「本郷佐字音」があてられ、śa に「本郷沙字音」があてられた理由について、「はじめの c には、サの万葉がなとしてもっとも一般的であった佐をあて、ś のばあいには、大唐の沙字および娑字と対比するために、本郷の沙字をもちいた」可能性(しかしながら、日本語音と中国語音の比較はこの際円仁の関心事ではなく、かりにそのような氣まぐれを起したとしたら、かならずただし書きをしたはずである)のほかに、「c [と] ch には精母 [ts] 照母 ts[] をもちい [、] ś には審母 [ś], sh には疏母 [ʃ], s には心母 [s] をもちいてきた悉曇対注漢字の伝統というのがはたらいていた」可能性を提示し、円仁の教えを伝える安然の『悉曇藏』から「CA 左^{上声}突舌 CHA 車^{上声}絶音 ŚA 奢^{上声} SA 瀾^{上声} 屈舌 SA 娑^{上声}」という個所を引用し、「声母はやはり伝統的悉曇対注漢字と同様なものをもちいている」と言っている(馬淵, op. cit., II, 1963, p. 1093)。

円仁がラトナチャンドラから学んだサンスクリット音韻の音価を記述しているという点では『在唐記』も『悉曇藏』も同じであるが、サンスクリットとの比較に用いた言語が異なる。すなわち、前者では原則的に日本語であるに対し後者では中国語である。『悉曇藏』で ca に“佐”(tsa) をあてて、「突舌」とただし書きをしているが、「突」は「平面の中の一つ所がもち上がる」ことを意味するから、「突舌」とは「舌の中央部分をもち上げ〔て口蓋に接触させ〕ること」を意味する。サンスクリットの /c/ は、「中国語の /ts/

サンスクリットにある音韻対立が日本語にない場合、二つあるいは三つのサンスクリット音に同一の日本語音をあてざるを得ない。そのような場合、円仁はかならずただし書きをして、同じ日本語音をあてた異なるサンスクリット音間の違いを指摘している。ḍa と ḍa のどちらにも「本郷陀字音」をあてているが、ḍa については「但加舌音」と言い、ḍa については「但加齒音」と言っている。²⁰⁾「加舌音」とは「〔日本語の対応音に〕捲舌音の性質を加えること」すなわち「/ダ/を発音する場合よりも〔調音位置を後に移し〕舌先を後にそらすこと」を指し、²¹⁾「加齒音」とは「/ダ/を発音する場合よりも調音位置を前に移すこと」を指す。²²⁾このように、日本語を基準にして、二つのサンスクリット音の差異を指摘している。同じように、ba, bha および va のいずれにも「本郷婆字音」をあてている。その際、bha が発音される場合については「断氣」と言って /bh/ が有声気音であるとし、無気音 /b/ との差異を指摘している。また、ba は「重」であり va は「軽」であるとして、/b/ と /v/ の差異が発音の際の閉鎖の強弱にあることを指摘している。²³⁾

と違って調音位置が硬口蓋である」ことを指摘している。このように、中国語音韻との対比のもとにサンスクリット音韻を記述しているのである。『悉曇藏』ではサンスクリット音に中国音を対照させているのであるから、「伝統的な悉曇対注漢字と同様なものをもちいている」のは当然である。ところが、『在唐記』では可能な限りサンスクリット音に日本語音を対照させているのであって、“佐”と“沙”がたまたま「伝統的な悉曇対注漢字」に一致するにしても、円仁の意図はもっぱら日本語音を提示することにあって、悉曇対注の伝統に従って文字を選ぼうとしたわけではないのである。注45と51を参照。

20) 円仁, op. cit.: ḍA 𑖅。以本郷陀字音呼之。但加舌音。下字亦然。Ibid.: ḍA 以本郷陀字音呼之。但加齒音。下字亦然。なお、サンスクリット音節 ṭa の音価を記述する際に、円仁は“吒”(ṭa)をあてている。Ibid.: ṭA 吒。舌音吒字。以唐音呼之。『韻鏡』の図式では、「齒音」(齒茎破擦音/齒茎摩擦音)に対立する「舌音」は、齒茎閉鎖音/齒茎鼻音と捲舌閉鎖音/捲舌鼻音を包括するカテゴリーであるが、円仁は /t/ を「齒音」とし (op. cit.: ṭA 𑖅 齒音)、/t/ を「舌音」とする (ibid.: ṭA 吒 舌音吒字)。すなわち、円仁は「齒聲音」という語をインド音声学の“dantya”(齒の音)と文字通り同じ意味で用い、“舌音”という語を“mūrdhanya”(頂上の音)すなわち捲舌音の意味で使っている。

21) TP 2.27: jihvāgreṇa prativeṣṭya mūrdhni [sparśayati] ṭavarge [kārye]// 『/t/ 系列の音〔すなわち /t/ /ṭh/ /ḍ/ /ḍh/ /ṇ/〕が発せられる時、舌先を後に捲いて〔口腔の〕頂点の所で接触させる。』*Tribhāṣyaratna* ad loc.: mūrdhaśabdena vaktravivaroparibhāgo vivakṣyate// 『“mūrdhan”(頂上)という語は、「口腔の上部」を意味する。』舌先が触れることのできる最高点、すなわち齒茎後方の硬口蓋前部をインド人は「口腔の頂上」と考えた。なお、「口腔」を指す語は“vaktra-vivara”(口の穴)である。“mūrdhan”という語は「一番上の部分」を意味し、「身体が一番上の部分」すなわち「頭」の意味で使われることが多い。十九世紀の学者がこの語を“cerebral”すなわち「脳(cerebrum)の〔音〕」と誤訳したのはこのためである。

22) TP 2.38: jihvāgreṇa tavarge dantamūleṣu// 『/t/ 系列の音〔すなわち /t/ /ṭh/ /ḍ/ /ḍh/ /ṇ/〕が発せられる時、舌先を齒の根元に接触させる。』

23) 円仁, op. cit.: BA 以本郷婆字音呼之。下字亦然。Ibid.: BHA 以本郷婆字音呼之。但断氣。Ibid.: VA 以本郷婆字音呼之。向前婆字是重。此婆字是輕。

Tribhāṣyaratna ad TP 2.43: vakāre kārye 'dharoṣṭhāntābhyām uttaradantāgraiḥ saha sparśayet// 『/v/ の音が発せられる時、下唇の二つの(?)先端を上齒の先端とともに接触させる。』このよう

もしサンスクリットの ca と śa にあてた日本語音節が同じであったなら、円仁はかならずただし書きをして /c/ と /ś/ の違いを指摘したにちがいない。何のただし書きもない以上、ca にあてられた日本語音節「本郷佐字音」は śa にあてられた日本語音節「本郷沙字音」とは別のものであったのである。

そうすると、日本語の表音記号として“佐”と“沙”が等価である以上、「本郷佐字音」が日本語音節であるなら、円仁の言う「本郷沙字音」は日本語固有の音節ではありえない。もちろんこれは中国語音節でもない。中国の「沙字音」は、円仁が別のサンスクリット音節 śa に対応させている。²⁴⁾ それに、「本郷沙字音」は、「本郷音」である以上、日本人に使われている音にちがいない。したがって、円仁の言及する「本郷沙字音」とは「漢字“沙”の日本式読み方」のことであると考えざるを得ないのである。²⁵⁾

Ⅲ 円仁の言う「本郷沙字音」の音価

七世紀末の日本語を伝える『古事記』には、“シ”にあたる表音漢字が七種用いられ、あわせて478回現われる。このうち、中国語記号として [ts] を頭音とする音節を表記するものは“紫”だけで、しかも地名“筑紫”(14回)以外には使われていない。“師”(sīui)が24回、“新”(siēn)が6回、“色”(šġək)が12回現われるが、すべて個有名詞のみに用いられている。普通名詞に用いられているものとしては、“芝”(zhī)が1回現われるほかは、“斯”(siē)が216回現われ、“志”(tšiei)が205回現われる。²⁶⁾『日本書紀』では、“シ”にあたる表音漢字三十五種のうち、

に、すでにプラーティシャーキヤの時代に /v/ は摩擦音として規定されている(本来は /u/ に対応する半母音 /u/ である)。両唇音 /b/ と 唇歯音 /v/ とを比較する際、調音位置の違いに円仁は気付いていない。
24) Ibid.: ŚA 以大唐沙字音勢呼。但去音。唇齒不大開。合呼之。

25) サンスクリット音節 ṇa (ṇa) の音価を記述する際に円仁が対応音としてあげる「本郷鼻音之我字音」もこの種の外来音であったと考えられる。“我”はもともと中国語音節 ṇa を表わすものであるが、日本語では ga を表わす表音記号として用いられ、円仁もサンスクリット音節 ga の音価を記述する際に「本郷我字音」をあてている。

「本郷鼻音之我」が現在東京方言で用いられているという /ガ/ の条件異音 [ṇa] に類するものであるとは考えにくい。八世紀の日本で有声閉鎖音を表記するために、当時中国語長安方言に起った非鼻音化現象を反映して、中国語の鼻音記号が有声閉鎖音記号の交代記号として使われたため、文字の混用状況が生じている(儀 piē, 伎 giē→/ギ/; 眉 mi, 備 bui→/ビ/)。円仁がサンスクリット音節 ḍa にあてるのは、中国語では ṇa を表わす“拏”であり、サンスクリット音節 ṇa にも同じ字をあてるが、その際は「拏鼻音」とことわっている。

たとえ異音であっても、当時の日本語に [v] があったのなら、こういう混用はなかったはずである。また、[ṇa] に言及する同時代の記録はほかには全くない。

やはり円仁の言及する「本郷鼻音之我」は、外来語を発音する際にのみ用いられた音であろう。サンスクリット音節 ṇa にあてられた [nya] も外来音ないし外国音模倣音であったと思われる。円仁, op. cit.: ṆA 爾也反。爾也兩字以本郷音呼之。

26) 馬淵和夫,『「古事記」のシ・オ・ホのかな』,『国語学』, 31, pp. 61—89。

中国語記号としては [ts] を頭音とする音節を表記するものは、“子” (tsiei), “資” (tsii) および“茲” (tsiei) の三種だけであり、頻度も低い。

このように、“佐” (tsa) 系統の字が圧倒的に多く用いられているア段音節の場合とは状況がかなり異なる。イ段音節の頭音とア段音節の頭音は、音韻としては同じであったにしても、すなわち当時の日本人が同じものとして意識していたにしても、実際の音価は異なったものであったにちがいない。²⁷⁾

サンスクリット音節 ca の音価を記述する際に、円仁はただし書きをして、「サンスクリットの /c/ は、/a/ が後続すると閉鎖度が低く、/a/ 以外の母音に後続すると閉鎖度が高い」と言う。²⁸⁾ しかしながら、サンスクリットの /c/ は、後続母音の種類によって音価が変わることはない。²⁹⁾ したがって、円仁がここで閉鎖度が高いとか低いとか言うのは、対応日本語音節と比較した上でのことであると考えざるを得ない。「サンスクリットの ci cu ce co は、日本語の対応音節に比べると、閉鎖度が高い。すなわち、サンスクリットの方が閉鎖音ないし破擦音であるのに対し、日本語の方は摩擦音である」ということになる。そうであったとすると、現代語の /シ/ /ス/ /セ/ /ソ/ に対応する音節 [ʃ] を頭音としていたということになる。

さて、『隋書』(635—656) に日本語の固有名詞が見えるが、そのなかで“多利思比孤” (ta-li-siei-pii-ko 人名) と“竹斯” (truk-siē 筑紫) は問題の音節を含んでいる。³⁰⁾ 中国人は [si/ʃi]

27) “斯” (siē) によっても“志” (ʃiei) によっても表記された音節を想定する場合、蓋然性の最も高いのは ʃi であろう (頭音の調音方法は [s] と同じで、調音位置は [tʃ] と同じ)。

28) 円仁, op. cit.: 比字輕微呼之。下字重音呼之。この後半部「下字重音呼之」は、「/a/ 以外の母音が後続するとき、[日本語対応音に比べると、] サンスクリットの /c/ は閉鎖度が高い」ということになる。/a/ 以外の母音に後続されるサンスクリットの /c/ を聞いた時、対応日本語音韻と極めて違った印象を受けたので、すなわち、サンスクリット /c/ の閉鎖音印象が極めて強かったので、/a/ が後続する場合には、実際の閉鎖度は同じであるにもかかわらず、閉鎖度が低いという感じを受けたものと思われる。後続母音の違いによって子音の音価が異なると円仁が記すのはここだけである。「/a/ 以外の母音に後続される音節」には cā, cī, cū, cai, cau などもあるが、この部分の記述が日本語音との比較を前提とするとしか考えられない以上、日本語音節に対応するとされる ci, cu, ce, co 以外は円仁の念頭になかったと思われる。また、後続母音の違いによってサンスクリット音 /c/ の閉鎖度が違うと円仁が感じたということは日本語サ行音頭音の音声学差異 ([tʃ] 対 [ʃ]) を意識していなかったということになる。

29) /c/ の音価については、注12を参照。円仁自身もこのただし書きの前で、「/a/ 以外の母音が後続する場合も、[/c/ の発音の仕方は] 同様である」と言い、音韻としては同じであるとみなしている。Cf. 円仁, op. cit., loc. cit.: 下字亦然。

30) 『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』, ed. 和田清・石原道博, 1951, p. 88 ff. Cf. 有坂秀世, 『国語音韻史の研究』, 1944, p. 145。

有坂のあげる『隋書』の固有名詞にはこのほかに、“都斯麻” (対馬) と“阿蘇”があるが、この際の資料

と [tʃi] を区別できたから、もし [tʃi] と聞いたなら、“志” (tʃiei) 系統の記号を用いたはずである。³¹⁾ 七世紀の日本語では現代語の /シ/ に相当する音節の頭音は摩擦音であったということになる。³²⁾

漢字“注”によって表記された中国語音節は tʃiu であるから、日本での音読みは呉音がス、漢音がシウになるはずであるが、実際に通用しているのはチウであり、かつては ti-u と読まれていたことになる。“注”の読み方は ʃi-u/ʃi-iu と ti-u/ti-iu の二通りあったらしく、観智院本『類聚名義抄』では、この漢字の「和音」としてシウとチウの二つをあげている。³³⁾ 日本人には tʃi が ti と ʃi とも聞えたということである。日本語に tʃi という音節があって ti と対立していたなら、このような混乱は起らなかったはずである。³⁴⁾

として確実に欠ける。“都斯麻” (対馬) は日本人の表記法によるものである可能性が高い。“都”も“斯”も“麻”も、「推古遺文」(七世紀前半) 以来表音記号として日本で一般に用いられていた文字である。“阿蘇”の“阿”もそうである。“蘇”が表音記号として日本で用いられているのが見られるのは『日本書紀』以降であるが、実際にはそれ以前から使われていたかも知れない。いずれにしても以後現在まで用いられている日本語の固有名詞表記法が外国人の創始によるものとは考えにくい。

31) このほかに、『日本書紀』に引用されている朝鮮資料『百濟本記』に見られる固有名詞、“意斯移麻岐彌” (人名、押山君)、^{おしやまきみ} “斯那奴” (信濃)、“沙至比跪” (人名) および“既酒臣” (人名) を有坂はあげているが、この際の資料として適当ではない。“意斯移麻岐彌”の六字と“斯那奴”の三字は、すべて「推古遺文」以来表音記号として日本で普通に使われているものであり、“斯那奴”は同じ資料の中で“科野” (“科”は日本式訓読み) と書かれている。この二つの固有名詞は、日本人の書いたものをそのまま写したものである可能性が高い。また、『日本書紀』の編集は“沙至比跪”を“襲津彦”と同定しており、もしこれが正しいなら、“沙”は“ソ”に相当することになるが、『書紀集解』の著書はこの同定を疑っている、(『書紀集解』, 卷上, 『国民精神文化文献』, 5, 1936, p. 372)。“既酒臣”は「許勢臣」^{こさきみ}を表記したものであるから、“酒”は“セ”にあたることになるが、日本固有の制度である「かばね」(姓) の一種「おみ」に“臣”の字を用いるのは日本の表記法によるものである。

32) このように、「シ」の頭音は餘程古くから既に摩擦性のもの ([s] 又は [ʃ]) であったことの可能性 (有坂 op. cit., p. 151) は確かにある。ただし、九世紀にはじまるサ行イ音便 (シメシテ>シメイテ, ホシテ>ホイテ) が「アフリカータよりは寧ろ単純な摩擦音にふさわしい音韻現象である」(有坂, op. cit., p. 144) と言うのは誤りである。サ行イ音便以外で子音脱落母音保持が見られるのは、カ行ガ行イ音便 (オキテ>オイテ, ツギテ>ツイテ) とカ行ウ音便 (クハシク>クハシウ) の場合だけであり、脱落するのは軟口蓋閉鎖音 [k/g] である。逆に子音保持母音脱落が見られるのはハ行ウ音便 (イモヒト>imoɸito>イモウト) の場合だけで、保持されるのは両唇無摩擦音 [ɸ] (<[ɸ]) である。このように、むしろ閉鎖度の高い子音が脱落し保持されるのは閉鎖度の最も低い子音である。もし音便の起こるのが閉鎖度に関係があるとしたら、有坂の予想とは逆に摩擦音よりもむしろ破擦音の方が脱落しやすいということになる。

33) 『類聚名義抄』(観智院本, 写真複製版, pub. 山田孝雄, 1936), 「法」上, 17丁裏。

34) “至” (tʃii) は「推古遺文」で“知” (tiě) “智” (tiě) とともに“チ”に相当する記号として用いられ、『日本書紀』にさえ見られる (「木里満至」)。この種の用法を「上古漢語の声母体系の名残り」(藤堂, 「漢字概説」, 『岩波講座・日本語』, 8, p. 152) とするまでもなく、古代日本語に音節 tʃi がなかったという仮定に立って説明できる。“都” (tu) の交代記号“川” (k'iuən>tʃ'ruən) が『万葉集』に見られるが、これは上古漢語音からは説明できない。

聖語藏『阿毗達磨雜集論』に見られる発音表記は九世紀初頭のものであるが、“配釈”(p'uəi-ſiek)という語の音価を記述して、“波己志阿久”(øai志aku)としている(“志”に表記される中国語音価は tſiəi)。逆に“臭”(tſ'iəu)の音価は“首”(ſ'iəu)で示されている。また、西大寺本『金光明最勝王經』写本の発音表記も同じころのものであるが、“捨棄”(ſiä-k'ii)の音価を“シアキイ”で表わし、“遮止”(tſiä-tſiəi)の音価を“シア〔シ〕”で表わしている。³⁵⁾このことから、当時の日本人が [ſi] と [tſi] を区別できなかったということが確認される。また介音 [i] を含む中国語の単音節を日本人は複音節として受け取っていたことが判る(ſiä>ſi-a)。

七世紀以来 [ſ]+[i] の音声結合が日本語にあったとすれば、また介音 [i] を含む中国語音節が複音節に変えられていたとすれば、日本人は中国語の“舍”(ſiä)を読む時に [ſi-a] と発音していたにちががなく、現代まで伝えられる音読みは「漢音」「呉音」とも“シャ”と表記される。九世紀に“索”(ſak)の音価は“昔”(siek>ſi-a-ku)で記述されている。³⁶⁾ [ſ] はもともと聴音印象が [ſ] に以た音であるが、当時の日本人にとって発音しにくい音であり、ſi という音節が日本語にあったとすれば、“沙”や“紗”(ſä)も同じように [ſi-a] と読まれていたと考えられる。「呉音」は七世紀まで日本の標準漢字音であり、その後も僧侶の間で保持された。現在まで伝えられる“沙”や“紗”の「呉音」は“シャ”と表記され、“舍”の「音読み」(「呉音」および「漢音」と同じである。なお、“娑”(sa)はサンスクリットの sa を音訳するのに用いられる字であるが、七―九世紀の日本では [ſi-a] と読まれていたと考えられ、現代まで伝わる「慣用音」は同じように“シャ”で表わされる(サンスクリット sabhā>“娑婆”シャバ)。九世紀の発音注記を見ると、“施”(ziuen)の音価は“善”(ziēn)で示されており、³⁷⁾ 歯茎音と硬口蓋音の区別がなされていない。

“斯”または“志”で表記された日本語音節は ſi であり、円仁がサンスクリット音節 śa にあてた「本郷沙字音」の実体は、ſi-a であった。³⁸⁾

35) 春日政治、『古訓點の研究』, 1956, p. 142, p. 143.

36) Ibid., p. 142.

37) Ibid., p. 141.

38) 中国語の“沙”(ſä)を日本人が発音する場合、中国語音を模倣して ſi-a と二音節に発音する方法と、日本語固有の音韻に転換して一音節(“佐”によって表記される音節)で発音する方法の二つが、少なくともある時期までは並んで行われていた。西大寺本『金光明最勝王經』古点には「捨シア」「遮シア」に並行して「遮サ」が見られる。春日政治、『西大寺本金光明最勝王經古點の国語学的研究』, 1969, p. 13, l. 10.

『源氏物語』(11世紀初頭)では、「ぎやう」(行)、「ちやう」(帳)など、『サ・ザ行以外の行の拗音は、みなひととおりにしか表記法がない(「[フ]びや[う」(病))をのぞく)のに、サ・ザ行にかぎり、いわゆる直音字と拗音字のふたとおりの表記法が存在している「[さく」(尺):「[しやう」(将)など』という(馬淵, 『日本韻学史の研究』Ⅱ, pp. 1098—1099)。中国語音節を二通りに発音する古来の習慣を反映するものであろうか。あるいは、すでにこの頃“サ”の音が tſa から ſa に変化していた状況を示すものであろうか。

Ⅳ “佐” または “沙” で表記された日本語音節

“舍” “沙” “娑” の三字は、外国語として読む時は [ʃi-a] と発音していたとしても、日本語の表音記号としては“佐”と同価値であった。そうすると、“佐”または“沙/娑/舍”によって、いかなる音価の日本語音節が表記されていたのであろうか。サンスクリット音節 sa³⁹⁾ の音価を記述する際、円仁は日本語音節をあげてこれに対応させることができず、記号“娑”によって表わされる中国語音節 sa をあてざるを得なかった。⁴⁰⁾ サンスクリット音節 śa⁴¹⁾ の音価を記述する際にも、円仁は日本語音節をあげてこれと対応させることができず、記号“沙”によって表わされる中国語音節 šā をあてざるを得なかった。⁴²⁾ 当時の日本語には sa という音節も śa という音節もなかったということになる。そうすると、“佐/沙”によって表記されていた日本語音節の音価として残る可能性は tsa または ʃa ということになるのであろうか。

ところが、[ts] と [ʃ] は調音位置も調音方法も異なるので、一方を表示する記号が他方の表示にも使われたと想定するのは困難である。もしこの音節が tsa であったなら、中国語で同じ音節を表記する“佐/左”のみが日本語用記号として採用され、“沙/娑/舍”はしりぞけられたはずである。逆に ʃa であったなら、“沙/娑/舍”のみが採用され、“佐/左”はしりぞけられたはずである。この音節は、tsa でも ʃa でもなかった可能性が高い。

サンスクリット音にぴたりと一致する音が日本語にないと判断される場合、円仁は二つの方法のうちいずれかをとった。すなわち、なるべく近い日本語音をあてた上で調音の違いを説明するのが第一の方法であり、対応音を日本語に求めるのをあきらめて中国語音をあてるのが第二の方法である。第一の方法をとる場合については後で述べる。第二の方法をとる場合をあげると、śa と sa にはそれぞれ「大唐沙字音」(śā) と「大唐娑字音」(sa) をあてている。また、ṭa には「吒」の唐音(ṭā)をあて、ha と kṣa にはそれぞれ「大唐賀字音」(ḥa) と「葛叉」の唐国音をあてている。⁴³⁾

39) 『ターイッティリーヤ・プラーティシャーキヤ』によれば、/s/ が発音される際の調音運動は、基本的に /t/ の場合と同じで、「舌尖を歯の根元に接触させる。」ただし、完全に閉鎖がなされるのではなく、舌の中央が開いて狭い通路ができる。Cf. 本論文, p.76, ll. 10—13. 注54。

40) 円仁, op. cit.: SA 以大唐娑字音勢呼之。但去声呼之。

41) 『ターイッティリーヤ・プラーティシャーキヤ』によれば、/ś/ が発音される際の調音運動は、基本的に /t/ の場合と同じで、「舌尖を後に捲いて〔口腔の〕頂点に接触させる。」ただし、完全に閉鎖がなされるのではなく、舌の中央が開いて狭い通路ができる。Cf. 本論文, p. 76, ll. 10—13. 注54。

42) 注24を参照。

43) 円仁, op. cit.: ṬA 吒。舌音吒字〔音〕。以唐音呼之。Ibid.: HA 以大唐賀字音勢呼之。KṢA [葛叉反。] 葛叉兩字依唐国音呼之。

t_{sa} も ʃa もサンスクリットの ca (tʃa) にびたりと一致しない。七世紀以来“佐/沙”で表記されていた日本語音節が、もし t_{sa} であったなら、円仁は「本郷佐字音」をあてたにしても、調音位置の違いを説明するただし書きをつけ加えたであろう。そういうただし書きが全くないところから見て、「本郷佐字音」が t_{sa} であったと仮定するのは困難である。なお、中国語にも ca にびたりと一致する音節がないので、この日本語音節が t_{sa} であったとしても、その程度の違いなら、「大唐音」(“佐” t_{sa} または“遮” tʃiǎ) をわざわざあてるまでもない。

もしこの日本語音節が ʃa であったなら、サンスクリットの śa に一致する音が日本語にあったことになるのであるから、śa にこの音節をあてるには何の問題もない。ただそれだけに無条件で ca に同じ音節をあてることはできない。ca にも同一の日本語音節 ʃa をあてたのであれば、śa と ca の違いを何かの形で説明したはずである。⁴⁴⁾ あるいは ca の方には「大唐佐字音」(t_{sa}) か「大唐遮字音」(tʃiǎ) をあてたであろう。やはり、この音節が ʃa であったとも考えにくい。

この日本語音節が“佐”系統の記号と“沙”系統の記号のいずれによっても表記されていたというのはものの、圧倒的に多く用いられてるのは“佐”系統の記号である。問題の日本語音節を ʃa と仮定したのでは、この事実を説明することは不可能である。[ts] と [ʃ] は調音方法も調音位置も異なる。t_{sa} を表わす中国語記号を用いて日本語音節 ʃa を表記していたなどとはとうていありえることではない。

この点から見ても、問題の日本語音節が t_{sa} あるいは ʃa のいずれかであったとは考えられない。

とはいうものの、“佐”系統の記号あるいは“沙”系統の記号のいずれによっても表記されていた日本語音節は、“佐”の中国語音 t_{sa} と“沙/娑/舍”の日本式発音 ʃi-a のいずれにも似たものであったであろう。

	齒茎	硬口蓋
破擦	ts	(tʃ)
摩擦	(s)	ʃ

[ts] と [tʃ] の両方に類似する音声は、齒茎摩擦音 [s] と硬口蓋破擦音 [tʃ] である。[s] は調音位置が [ts] と同じで、調音方法が [ʃ] と同じである。[tʃ] は調音位置が [ʃ] と同じ

“叉”が表記する中国語音節は tʃʰǎ であるが、kʃa の第二子音にあてられているのは不可解である。この音節を含むサンスクリットの単語で中国語に音訳されているものに“yakṣa” (夜叉), “kṣaṇa” (刹那), “kṣatriya” (刹帝利), “rākṣasa” (羅刹) などがあるが、kʃa は常に tʃʰǎ 表示記号で音訳されている(“刹” tʃʰǎt > tʃʰǎ)。kʃa のブラックリット形 cha を写したものであろうか。

44) va と ba の場合と同じように、閉鎖度の違いであるから、「ca字是重 śa字是輕」という形の説明があったはずである。

で、調音方法が [ts] と同じである。

円仁の記述から知られるように、[s] と [tʃ] のうち、[s] は当時の日本語になかった。したがって、“佐”または“沙/娑/舍”の記号によって表記された日本語音節は、硬口蓋破擦音を頭音とする tʃa であった。⁴⁵⁾

すでに述べたように、二つまたは三つのサンスクリット音に同一の日本語音をあてざるをえなかった場合、円仁はサンスクリット音間の差異を指摘しているが、その結果、サンスクリット音と対応日本語音との差異も同時に理解されることになる。ḍa と da の場合は対応日本語音を基準にして差異が指摘されているし、ba と bha と va の場合も、対応日本語音がこの三音のいずれかと等価であると仮定すれば、他の二音との差異が知られる。

一対一で対応させる場合でも、サンスクリット音と日本語音との差異が認められる場合はただし書きをしている。円仁は pa に「本郷波字音」をあてるが、ここで「加唇音」とする。⁴⁶⁾ 対応日本語子音に比べてサンスクリット子音 /p/ の方が「唇音性がさらに加わっている」すなわち「閉鎖度が高い」ということである。対応日本語子音は /ɸ/ であったということになる。

ところが、サンスクリットの ka, ga, ba および la の音価を記述する際、円仁はこのようなただし書きをしていない。対応すべき日本語音 (/カ/, /ガ/, /バ/, /ラ/) との差異を認めなかったのである。⁴⁷⁾

サンスクリット音節 ca の音価を記述する際、円仁は対応日本語音韻との差異を指摘していない。対応日本語子音がサンスクリットの /c/ に等しいと円仁は判断したのである。

「本郷佐子音勢」の「勢」の語は、サンスクリット音 /c/ と対応日本語子音との音価差を示すものではあるまい。日本語に対応音韻のないサンスクリット音韻 /e/ /o/ /au/ /ɨ/ ⁴⁸⁾ /ñ/

45) 中国語では八世紀中葉まで、サンスクリットの ca にもっぱら“遮” (tʃiǎ) と“者” (tʃiǎ) があてられが、それ以後は“左” (tsa) が用いられた。問題の日本語音節を“佐”で表記する習慣は少なくとも七世紀前半にはできていたのであるから、円仁の「本郷佐字」は日本語の正字法にのっとったものであり、中国におけるサンスクリット音表記の習慣と無関係である。

46) 円仁, op. cit.: PA 唇音。以本郷波字音呼之。下字亦然。皆加唇音。

47) Ibid.: KA 以本郷加音呼之。下字亦然。以下諸字皆去呼之。Ibid.: GA 本郷我字音。下字亦然。

Ibid.: BA 以本郷婆字音呼之。下字亦然。Ibid.: LA 以本郷羅字音呼之。

48) サンスクリットの /e/ および /o/ は、インド音声学で「結合母音」(saṃdhyakṣara) と見なされている。Tribhāṣyaratna ad TP 10.4-5: avarṇapūrva iṇarṇapare ca sati te ubhe akṣare ekāram āpnutaḥ, neṣṭir bhavati. avarṇapūrva uvarṇapare ca sati te ubhe akṣare okāram āpnutaḥ, iṣe tvorje tvā. 『/a/ が先行し /i/ が後続するとき、この二つの母音は /e/ になる。例えば、“na iṣṭir bhavati” は“neṣṭir bhavati”となる。また、/a/ が先行し /u/ が後続するとき、この二つの母音は /o/ になる。例えば、“iṣe tvā ūrje tvā” は“iṣe tvorje tvā”となる。』したがって、/e/ と /o/ は常に2モーラの長母音である。

サンスクリットの母音のうち「均質母音」(samānakṣara) とされているのは、/a/ /i/ /u/ の三つだけ

/d/ /n/ および /v/⁴⁹⁾に「本郷音」をあてる際に、円仁は「勢」の語を用いていない。また、サンスクリット音 /p/ に「本郷波字音」をあてる際には「加唇音」と調音方法の差を示す言葉をつけ加えるが、ここでも「勢」の語を用いていない。サンスクリット音に「本郷音」をあてる際に「勢」を用いているのは /ai/ に“哀”をあてた後で「初阿後伊之勢」と言う時だけであるがこの場合「勢」の語は対応日本語音との音価差を示唆するものではない。⁵⁰⁾

このように、サンスクリット音節 ca の音価を記述するために円仁があてた日本語音節、すなわち「本郷佐字音」は /tʃa/ であり、「本郷沙字音」は /ʃi-a/ であったと推定される。⁵¹⁾

であり、これ以外はすべて「結合母音」(saṃdhyakṣara) である。/ai/ は /a/+e/ または /a/+ai/ であり、/au/ は /a/+o/ または /a/+au/ である。/ɾ/ と /l/ については、学派によって取り扱いが少しずつ違うが、『ヴァーージャサネーイ・プラーティシャーキヤ』では、「子音 /ɾ/ /l/ がそれぞれ母音 /a/ と融合して一音となったもの」と言われ、母音の性質と子音の性質をあわせてもつ音とされる。Cf. *Vājasaneyiprātiśākhya* (ed. V. V. Sharma, Madras, 1934) 4.148: ṛlvarṇe rephalakārau saṃśliṣṭāv aśrutidharāv ekavarṇau. また『サルヴァサンマタ・シクシャー』(*Sarvasaṃmataśikṣā*) では、/ɾ/ と /l/ は「母音+子音+母音」という構造をもつとされ、前後に「わたり音」(glide) を認める。Cf. ŚŚ (ed. A. O. Franke, 1886) 19.

- 49) /ñ/ が発音される際の口腔内調音運動 (ābhyantara-prayatna) は、/c/ が発音される場合と同じである(注12を参照)。鼻音であることは次のように説明される。TP 2.52: nāsikavivaraṇād ānunāsikhyam// 『鼻〔への通路〕を開くことによって鼻音となる。』

/ḍ/ と /ṇ/ が発音される際の口腔内調音運動は、/t/ が発音される場合と同じである(注21を参照)。
/ṇ/ が鼻音であることについては、上を参照。

/l/ が発音される際の調音運動は、次のように説明されている。TP 2.42: dantamūleṣu ca [jihvāgrama-dhyena sparśayati] lakāre [kārye]// 『/l/ の音が発せられる時、舌先の中央部を歯の根元の所で接触させる。』

/v/ が発音される際の調音運動については、注23を参照。

- 50) 円仁, op. cit.: AI 長哀。々字以本郷音呼之。初阿後伊之勢。/ai/ の初めの部分が [a] で後の部分が [i] であるというのは正にその通りであって、このかぎりにおいて、対応日本語音との不一致はない。この点、「本郷佐字音勢」の「勢」について有坂の言うことは (op. cit., p. 150)、少なくともこの場合にはあてはまらない。

なお、サンスクリットの ṣa と sa にそれぞれ「大唐汰字」(ṣā) と「大唐娑字音」(sa) をてる際にも、円仁は「勢」の語を用いている。この「勢」も音価差を示すものではあるまい。Cf. 注24, 40。

- 51) 『大般若経字抄』1164年の写本に悉曇字母に仮名をつけた部分があり、ca, ccha および śca に“サ”をあて(ccha と śca には“サ”の交代記号である別字を使っている)、śa と ṣa には“シャ”をあてている(馬淵, 『国語音韻論』, 1971, p. 68)。「本郷佐字音」が tʃa であり、「本郷沙字音」が ʃi-a であった時代に確立したサンスクリット音の発音方法を文字の上で忠実に伝えたものと思われる。

日本語音節 tʃa を表記する記号として、『古事記』に“者”(tʃiǎ) が用いられているが頻度は高くなく、『古事記』と『日本書紀』に“尺”(tʃiek) が用いられているが頻度は極めて低い。当時の中国語で硬口蓋音は [i] の前でしか現われず、tʃa という音節はなかった。ところが、当時の日本語には tʃi という音節がなかったため、tʃja という音節は日本人にとってなじみにくかったにちがいない、おそらく ʃi-a と発音していたであろうし、ti-a と混同することもあったであろう。頭音が同じであるにもかかわらず、“者”系統の字が積極的に採用されることはなかったのはこのためである。

V 十二世紀における“サ”の音価

“佐”または“サ”の記号によって表わされる音節の音価に関して、もう一つ重要な資料がある。平安末期に書かれた心蓮（?—1181）の『悉曇口伝』である。

サ、穴事 以舌左右端附上腭開中呼 a 而開之則成サ音⁵²⁾

『“サ”〔の文字で表わされる音を発音する際〕の口腔〔内の発音器官〕の状態〔は、次の通りである〕。舌の左右の端を口蓋に付け、〔舌の〕中央部を開き、〔このようにしてできた狭い通路に息を通し、ただちに〕/a/ を発音して口を開く。こうすると“サ”〔の字で表わされる音〕になる。』

これに対応する記述が、『ターイッティリーヤ・プラーティシャーキャ』に見られる。

『〔各〕摩擦音 (ūṣman) は、順序に従って、〔それぞれ対応する〕閉鎖音 (sparśa) の〔調音〕場所 (sthāna) で〔発音される。すなわち、/ś/ は /c/ の調音場所で、/ṣ/ は /t/ の調音場所で、そして /s/ は /t/ の調音場所で発音される。』⁵³⁾

『ただし、〔その際に、調音〕器官 (karaṇa) の中央が開く。』⁵⁴⁾

「〔調音〕器官」とは動くもので、口蓋 (tālu) や歯根 (danta-mūla) など動かない「〔調音場所〕」に対応するものであり、舌 (jihvā) のことである。

心蓮は、「以舌左右端附上腭」と言い、「上腭」という語を使っている。もしここで記述しようとしている音が歯茎音なら、調音位置を「上腭」とはせず、「歯根」としたであろう。心蓮は /タ/ の頭音の調音位置を「歯根」として、/カ/ の頭音の調音位置を「腭」としているのである。⁵⁵⁾ 調音位置を「上腭」すなわち口蓋とする以上、心蓮がここで記述しようとする音は硬口蓋音であると考えざるをえない。また、「開中」（〔舌の〕中央部を開く）という記述から想定しえるのは摩擦音である。したがって「“サ”の文字で表わされる音」とは śa のことである。

『悉曇口伝』とは別に、心蓮は『悉曇相伝』を著わしているが、⁵⁶⁾ その中で「“サ”の文字で表わされる音が発音される際、強い息が出る」と言っている。⁵⁷⁾ /s/ の場合に比べて、/ś/ が発音される際は、狭窄通路が長く、より強い空気摩擦を伴う。

52) 『siddham 口伝秘中秘々』（金剛三昧院本，1234年写，1496年再写，高野山大学図書館所蔵），5丁，表9行—裏1行。

53) TP 2.44 : sparśasthāneṣūṣmāṇa ānupūrvyeṇa.

54) Ibid., 2.45 : karaṇamādhyam tu vivṛtam.

55) 心蓮, op. cit., 5丁，裏2—3行：タ、穴事 以舌端附上齒根呼 a。Ibid., 5丁表6—8行：カ、穴事以舌根附腭呼 a。

56) 『悉曇相伝』（金剛三昧院本，表題・コロフォンともに欠く，高野山大学図書館所蔵）。

『siddham』（持明院本，1199年写，1575年再写，高野山大学図書館所蔵）。『悉曇鈔』（光台院本，1847年再写，高野山大学図書館所蔵）。

57) 金剛三昧院本，67丁，表7行：氣強吹出呼 a 。

このように、心蓮の記述に基づいて、十二世紀に“サ”の文字が表わしていたのは、硬口蓋摩擦音 [ʃ] を頭音とする音節 ʃa であったと判断される。

明覚(1056—?)は『反字作法』⁵⁸⁾の中で次のように言っている。

者字_レ之野_レ反、捨舍_レ二字_レ書冶_レ反、可_レ云_レサ_レ。如何人皆云_二シヤ_一耶。

『“者”[の表わす音]は、“之”の声母 [ʃ] (<tʃ) と“野”の韻母 [ia] (<yǎ) との組み合わせで示される。“捨”“舍”二字[の表わす音]は、“書”の声母 [ʃ] (<ʃ) と“冶”の韻母 [ia] (<yǎ) との組み合わせで示される。[したがって両方とも ʃia であるが、これは仮名]“サ”[で表わされる音と事実上同じであるから、そのように発音すべきである。

どうして、人々はみんな ʃi-ia と発音するのであろうか。』

「漢字の“者”と“捨/舍”は、いずれも仮名文字“サ”によって表わされる音を用いて発音すべきである」と明覚が言うのは、“サ”によって表わされる音が十一世紀後半に ʃa になっていたからであると考えられる。音節 ʃa が成立した以上、日本語固有の音節を中国語音節 ʃia にあてることができるようになり、ʃi-a と二音節に読む七世紀以来の習慣は不要になったのである。

有坂秀世は、十三世紀初めに中国で著わされた『鶴林玉露』に言及している。⁵⁹⁾ この書物には著者の羅大経が日本人安覺から聞いた日本語の単語が記録されている。“沙禧”[唐音 ʃă-hiei>元音 ʃa-hi] (酒)，“加是羅”[kă-ziě-la>kia-ʃi-lo] (頭)，“洗和”[sei-hua>siəi-huo] (塩)，“蘇彌”[so-miě>su-mi] (墨)，“松蘇利”[sioŋ-so-li>sioŋ-su-li] (硯)。サ行音をアイウエオ順に並べると、ʃa—ʃi/siəi—su/sioŋ—?—? となり、有坂の云う通り、頭音が摩擦音であることが確認される。

十六世紀末から現在まで、サ行イ段音節は ʃi である。もし十三世紀にこれが si であったなら、si>ʃi という音韻変化が起ったことになる。ところが、少なくとも関東では十六世紀末までには ʃe>se という音韻変化が起っており、⁶⁰⁾ これと逆方向の音韻変化 si>ʃi を想定することは困難である。したがって、“是”(ʃi)と“洗”(siəi)が表記する日本語音節は ʃi であったと考えるべきである。“是”が表わす中国語音節の頭音は元代には捲舌音 [ʃ] となるが、唐代では硬口蓋音 [ʒ] であった。捲舌音 [ʃ] は聴覚印象が [s] よりも [ʃ] に近く、サンスクリットでも硬口蓋音 [ś](ʃ) に交代しがちな音である。“沙”(ʃă)の表記する日本語音節も sa よりも ʃa であった可能性が高い。なお、“松”に表わされる中国語音節 sioŋ には介音 [i] が存在するが、日本語音節の頭音が硬口蓋音であることを示すものかも知れない。

58) 『国語学大系』, vol. 4, 1938, p. 17, l. 12.

59) 有坂, op. cit., p. 144.

60) 橋本進吉, 『国語音韻史』, 1966, pp. 101-102.

十一世紀あるいは十二世紀に“サ”の文字が音節 ʃa を表わしていたとすれば、それ以前の段階で同じ文字が表わしていたと想定し得る音節は、ʃa (無変化) か sa (調音方法が同じで調音位置に近い) か tʃa (調音位置が同じで調音方法が似ている) のうちのいずれかである。

ところで、キリシタン文献に基づいて、十六世紀末に“サ”によって表わされたのは [sa] であることが確認されており、⁶¹⁾ 以後今日までこの音節の頭音は歯茎音 /s/ である。もし śa の前段階が sa であるとすれば、[s] > [ʃ] > [s] という音韻変化を認めることになるが、このように元に戻るというようなことはありそうもない。

[ʃ] の前段階が [tʃ] であるとすれば、[tʃ] > [ʃ] という自然な音韻変化を想定できる。⁶²⁾ そうすると、十二世紀の ʃa の前段階として考えられるのは ʃa (無変化) または tʃa である。いずれにしても頭音は硬口蓋音であり、九世紀の音価を tʃa とする前章の結論と矛盾しない。

日本語の /サ/ は、少なくとも九世紀中葉までは [tʃa] であった。そしておそらく十一世紀末までに、あるいはおそくとも十二世紀後半までに [ʃa] に変わった。

/ソ/ の万葉仮名として用いられている漢字は、摩擦音系統のよりも破擦音系統の方が多く、/サ/ の場合と同じである。⁶³⁾ このことから見て、/ソ/ は七世紀末に [tʃo] であったらしい。そして、円仁の時代 (九世紀中葉) には [ʃo] に変わっていた。

/ス/ と /ソ/ の万葉仮名として用いられている漢字は、摩擦音系統の方がむしろ多く、⁶⁴⁾ 円仁の時代と同じように七世紀末にも頭音は [ʃ] であったらしい ([ʃu], [ʃuo])。

『隋書』および『古事記』における表音漢字の用法から、七世紀に /シ/ が [ʃi] であったことが知られる。また、万葉仮名として用いられている漢字の使用状況が /シ/ の場合と似ていることから見て、⁶⁵⁾ /セ/ は七世紀末に [ʃe] であったらしい。円仁の記述によれば、/シ/ と /セ/ の頭音は九世紀中葉に [ʃ] であった。

高野山大学の御厚意により、『悉曇口伝』の写本 (『金剛三昧院本悉曇口伝秘中秘々』) と『悉曇相伝』の写本 (金剛昧院本、持明院本『siddham』および光台院本『悉曇鈔』) を参照することができた。酒井眞典学長と藤田光寛氏に感謝の意を表したい。

また、貴重な文献を快くお借し下さった国語学者 山内啓介氏の日頃の御親切にもあわせて謝意を表したい。

61) 橋本進吉、『キリシタン教義の研究』, 1961, p. 245.

62) 有坂秀世は、心蓮の記述から摩擦音を想定するものの、これを硬口蓋音 [ʃ] と歯茎音 [s] のいずれとも決定しない (有坂, op. cit., p. 144)。有坂は古代日本語のサ行頭音を歯茎音 [ts] と仮定しているのであるが、ここで論じたように、心蓮の記述する摩擦音は硬口蓋音と考えざるを得ず、有坂の仮説は成り立たない。[ts] が調音位置も調音方法も異なる [ʃ] にいきなり変わるというのはありそうもない。

63) 馬淵和夫、『国語音韻論』, 1971, p. 35.

64) Ibid., loc. cit.

65) Ibid., loc. cit.